+博論書式４（論博書式４）

平成 26 年 9 月 5 日

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分　　野	看護学分野
学籍番号		院生氏名	釜屋　洋子
通学キャンパス			
論　文　題　目	高齢者における口腔内細菌数とケア間隔に関する研究		
審査結果（枠で囲む）	合格　　不合格		

＜審査結果の要旨＞

研究の概要

療養型病床に入院している非経口摂取の高齢者に効果的な口腔ケア方法を検討する研究である。研究目的は自力で口腔内の清潔を保てない高齢者に対して、患者個人の身体的要因・背景の調査、口腔内の細菌数を経時的に計測し細菌数が多い人の要因を明らかにすること、さらに、口腔内細菌数の多い症例と少ない症例の細菌数の推移を比較し、口腔ケアの適切な間隔について明らかにすることである。

口腔ケア前の細菌数の中央値を用いて 78 万個以上群と未満群の 2 群を設定し、口腔内細菌数をアウトカムとしてケア前、口腔ケア実施後、30 分、60 分、2 時間、4 時間、6 時間を検討するために二元配置分散分析を行い、さらに、高齢者の要因については、意識レベル、意思伝達、指示の理解、会話、咀嚼などの迫田らが作製したアセスメントシートを用いて調査し、カイ二乗検定を行って分析した。また、大学倫理委員会の承認を得ている（承認番号 08-26）。

口腔内細菌数が 78 万個未満の高齢者ではケア 6 時間後まで 78 万個未満を維持していることから、6 時間の間隔があいても効果が持続する可能性があることが明らかとなった。また、患者個人の要因については 78 万個以上群と未満群の 2 群で比較すると歯牙の数で有意差があり残存歯のケアの必要性が明らかになった。

本研究の新規性は効果的な口腔ケアの判断基準を提示していることにあり、高齢者看護における効果的な摂食・嚥下ケアに貢献する研究として高く評価できる

審査会は 3 回実施し、第 1 回目は 8 月 6 日に開催した。誤嚥性肺炎の発生が懸念されている高齢者看護において、効果的な口腔ケア方法を検討した研究で価値のあるものではあるが、以下の点について修正を求めた。

1. 口腔ケア方法についての具体的な説明を求めた。
2. 細菌採取の方法についての具体的な説明を求めた。
3. 細菌数 100 万個以上、以下で群分けをして分析をしている状況から、この 100 万個の科学的根拠について具体的な説明を求めた。
4. 研究背景、研究方法については、具体的な説明を求めた。
5. 考察について、結果から導き出される内容として再度検討していただくことを求めた。

などの質疑・応答がなされた。

その結果から、第 2 回目の 8 月 28 日の審査の際には、以下の点について修正を求めた。

1. テーマ、目的、方法、結果、考察の研究の一貫性がない。
2. 研究方法についてさらに説明が必要な箇所があった。細菌数の希釈、分析方法など。
3. 結果の示し方についてさらに説明が必要な箇所があった。

などの質疑・応答がなされた。

その結果から、第 3 回目の 9 月 3 日の審査の際には、以下の点について修正を求めた。

1. 口腔内細菌数を時間経過で変化したことに重点をおいていることが分かるような記述を求めた。
2. 本研究結果を踏まえた適切な口腔ケアについて記述を求めた。
3. 非経口摂取の高齢者を対象にした研究であるので、研究背景の中でその重要性についての追加記述を求めた。

<table>
<tr><td colspan="2">上記の内容で質疑・応答がなされ、口頭試問においてもご本人の努力によって適切に応答できるようになった。その後に提出された論文の修正内容を確認し、合格とした。

以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</td></tr>
<tr><td>論文審査担当者</td><td>主　査　　内野　聖子
副　査　　柴本　勇
副　査　　青柳　美樹</td></tr>
</table>